回れ！4色の風車

～学生参加による高齢者サロンの持続性と発展可能性～

2021 年度　都市計画演習 2 班

青木 日花、石川 夏帆、鎌田 晴人、酒井 佑、
高橋 慧、樋口 小波、平山 裕紀人、松浦 海斗

第1章　はじめに

1.1 背景

私たちの班では、つくば市中心部と周辺部の違いが生み出す問題について調べることにした。つくば市周辺地域に住む高齢者にとって、交流が足りていないことは重要な困りごととなっており、高齢者の活発な交流は、孤独死の防止や精神面での健康へつながると考えられる。この問題に対して、つくば市は、高齢者の交流会を開催することで高齢者間の交流を促そうとしており、その実験として高須賀地区で初の交流会を実施しようとしていた。つくば市の企画段階では、このイベントは保健師を招き、高齢者の健康チェックを行うことを売りに、参加者同士の会話を創出しようというものであり、「高齢者サロン」と称していた。ここで、このイベントには、市役所と高齢者という 2 つの主体がかかわっていたことになる。しかし市は、このサロンに本当に高齢者が集まるのかどうか疑問を持っていた。そこで、私たちは、本演習を通してこのサロンに新たな主体を加えることで、このサロンをより魅力的にし、継続して行うことができないかということを考えた。

1.2 目的

高齢者の交流が不足している問題を解決するためには、高齢者サロンが継続的に開催されることが不可欠である。そこで、私たち学生が介入しつつ、持続的な開催が見込める高齢者サロンの仕組みづくりを行うことを目的とする。

第2章　本論

本演習ではプレ実証実験を踏まえて改善点を検討したのち、実証実験を通して目的の達成を図った。

2.1 プレ実証実験

a. 概要

多世代間で交流をすることは高齢者の孤立を防ぎ、精神的健康に良い影響を与えることがわかっている[1]ほか、多世代交流を望んでいるが実現できていない人が一定数存在することが内閣府の調査よりわかっている[2]。

そこで、高須賀地区で初めて実施される高齢者サロンに私たちが実際に参加し、3 主体による問題解決を目指した。高齢者サロンは高須賀地区の高齢者の交流促進を目的として、11 月 11 日に高須賀地区研修センターにて市役所・社会福祉協議会主催で行われた。サロンに参加した高齢者に対して学生にどのようなことが求められているのかを調査した。

b. 調査方法

サロン参加者へのアンケートを半構造化インタビュー形式により、高齢者の方とお話をしながら行った。

c. 結果

60 代～80 代の男性 3 名、女性 12 名で計 15 名の方にアンケートを取らせていただいた。アンケートより、参加者が学生

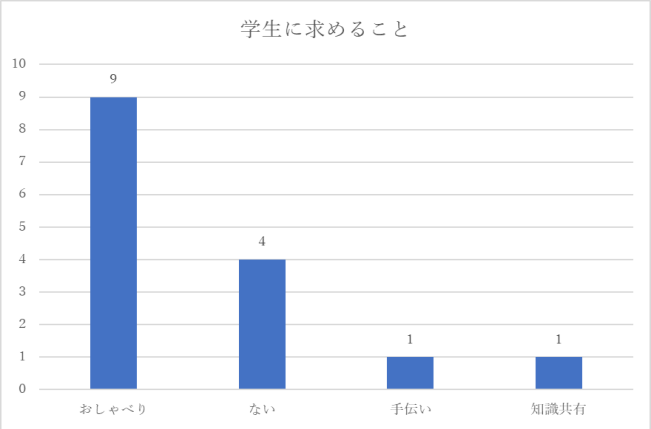

図 1　サロン参加者が学生に求めること

に求めるものについての回答より、高齢者から「おしゃべり」

が9人と最も多く求められていることが分かった。次に「ない」が4人と多く、「手伝い」や「知識共有」はそれほど求めていないことが分かった（図1）。一方で、学生のメリットが欠けているという課題が明らかになった。

2.2 改善案の検討

学生が参加するメリットが欠けているという課題を解決するため、学生が参加するインセンティブとなるものはないかを班員の中で考えてみた。それで出てきたアイデアを提案、実現可能性を検討するために、11月22日の13時30分より、高須賀研修センターにて、社会福祉協議会の大竹様、つくば市役所の松尾様、高須賀地域の民生委員の方との話し合いを行った。その結果、出荷の際にはじかれてしまうため食べられるのに畑に捨てられてしまう野菜を農家の方に提供していただき、それを参加した学生に配布する、という案が最も実現可能性が大きいという結論に至った。

2.3 学生アンケート

学生は野菜というインセンティブを参加するメリットとして感じるのかどうか、また、学生が実際にこの高齢者サロンに魅力を感じるのかを知るため、11月27日から29日まで、筑波大学の学類生を対象にアンケートを実施した。有効回答数は173となった。まず、何もインセンティブがない状態でも参加する意思があるかどうかを尋ね、その質問で参加意思がなかった回答者には(1)野菜がもらえる,(2)アルバイト代が出る,(3)市の施設が使える,(4)授業として実施し、単位が出る、という4つの条件を順に提示したうえでもう一度参加意思を聞いた。その結果、何もインセンティブを提示しない状態で「参加したい」と回答した人は全体の15.6%に当たる27人だった（図2）。そして、この質問で「参加したくない」と答えた回答者146人のうち、何らかのインセンティブがあるなら参加したいと回答した人は102人あった。さらに、その102人のうち野菜がもらえるという条件を示すと「参加したい」と回答した人は50人だった（図3）。この結果から、学生にサロンへの参加を促す条件として野菜がもらえることには効果があると結論付けた。

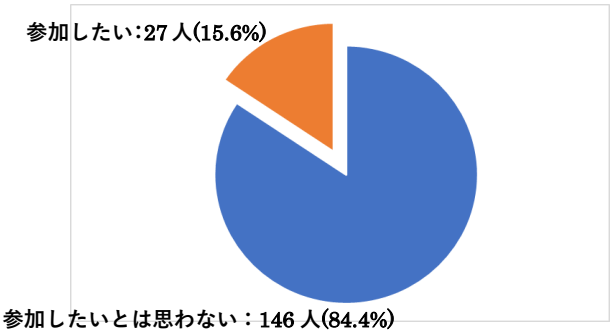

図 2　インセンティブなしでの参加意欲率

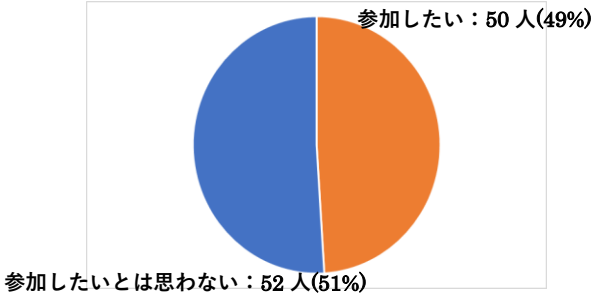

図 3　野菜に用意した場合の参加意欲率

2.4 実証実験

a. 概要

学生アンケートを踏まえ、インセンティブがある状態での高齢者サロンの開催で一定数の参加者が見込めたことを受け、市役所の松尾様と社会福祉協議会の大竹様に提案したところ、お話がつながっていき、最終的にJA谷田部の生産者の方から余った野菜をいただくことができるようになった。そこで、参加した学生に野菜を提供することを前提として、高齢者・市役所・学生・地元農家の4主体が絡む高齢者サロンを12月9日に開催することとした。学生に対してこの告知を口コミ、学類LINE、SNSを通じて行った結果、当日は9人の学生が参加し、サロンに集まった高齢者とのお話会が開催された。この高齢者サロンの場で、それぞれの主体が継続して参加することが現実的であるかを調査する実証実験を行った。

b. 調査方法

12月9日の高齢者サロンに参加した学生、高齢者、市役所・社会福祉協議会職員および野菜を提供してくださったJAの方に対して調査を行った。それぞれの主体について、gainがcostを上回ることで持続的な高齢者サロンを実現できると仮定し、高齢者サロンに参加することのgainおよびcostを調査した。

学生に対しては、学生にとってのgainは野菜をもらえること、costは移動コストであると仮定し、調査を進めた。実際に高齢者サロンに来た筑波大生の行動を質問用紙により調査し、来た学生の人数や実際のインセンティブを分析した。調査内容としては参加者の属性（参加意欲を持つ学生層の把握するため）、イベントを知ったきっかけ（告知効果を測定するため）、イベントに参加・今後参加する理由などを調査した。

高齢者に対するアンケートでは、高齢者にとってのgainはサロンでの話し相手ができること、costは会場までの移動とい

う設定で調査を進めた。今回のサロンへの印象や次回以降の参加意思を聞き、前回のサロンと関連した実態も調査することとした。

市役所・社会福祉協議会に対しては、当日参加した市役所の松尾様と、社会福祉協議会の大竹様にヒアリングを行った。内容としては、①市役所目線で高齢者サロンに学生が参加する事の意義、②市役所にとって gain が cost を上回っているか、③次回開催時に役立てる改善点を聞いた。

JA の方に対しては、野菜を提供することの gain が地元農家にとって本当にメリットとして感じるものなのか、実際に野菜を運搬する労力が cost となっているのかを測るため、12 月 9 日に開かれる高齢者サロンの前日の 12 月 8 日、JA つくば市谷田部 営農センターにて、JA つくば谷田部農業協同組合の太田様、横山様、産直部会の関口様、登坂和彦様にお話を伺った。

c. 結果

学生に対する調査より、参加者は地元野菜がもらえるという点の他にも、高齢者との交流をメリットとして高齢者サロンに参加したことが判明した。実際にあった意見としては、「ご老人といろいろなお話ができたら楽しそうだと思った」、「高齢者との交流を通してまちづくりに関わりたい」といった声があった。この結果から、学生側の意見としても、高齢者サロンに対する gain が cost を上回っていると考えることができる。

高齢者に対する調査では、回答数 12 人のうち、今回のサロンへの満足度については、12 人中 11 人が「満足」「やや満足」と回答した（図 4）。次回以降の参加については、「そう思う」という回答が 10 人だった（図 5）。前回に引き続き、サロン自体への印象はおおむねよかったといえる。また、前回と同様に、今回も普段の近所づきあいや地域活動への参加状況を質問したが、今回も参加者の多くが積極的な近所づきあいを持っていると答えた。参加者の会場までの移動手段としては徒歩で来られた方が多かったが、今回は自動車を利用した方もおり、ほとんどの参加者が、移動手段にかかわらず 5 分以内で会場に来

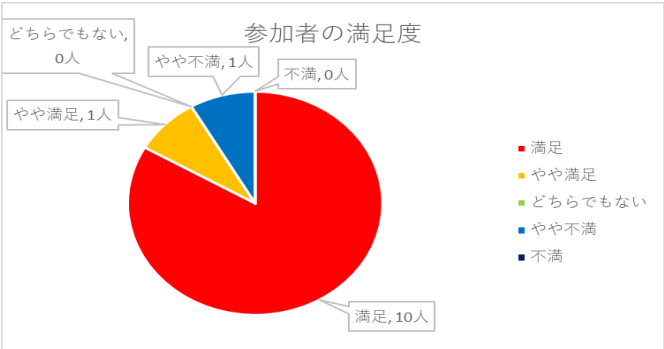

図 4　参加した高齢者の満足度

ることができると回答した。今回の結果からは、移動時間が 5 分以内の人に関しては cost が十分に低く、参加につながったのではないかと予想される（表 1）。

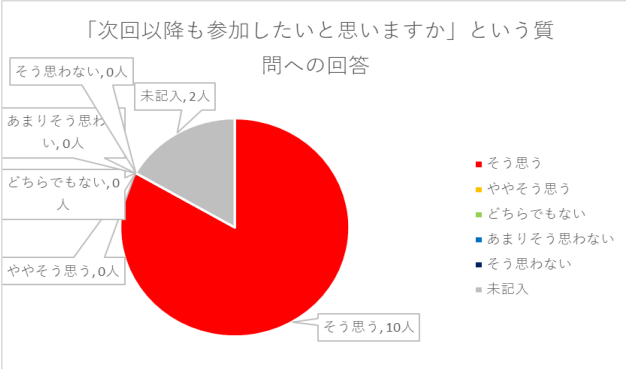

図 5　参加した高齢者の継続参加意欲

表 1　高齢者の会場までの移動手段と移動時間

高齢者の会場までの移動手段と移動時間				
	徒歩	自転車	自動車	合計
~5分	5	2	3	10
5分~10分	0	0	1	1
10分~20分	0	0	0	0
20分~	0	0	0	0
未記入	0	1	0	1
合計	5	3	4	12

松尾様・大竹様に対するヒアリングより、①市役所目線で高齢者サロンに学生が参加する事の意義としては、高齢者の参加を促進させる効果、能動的に関われる相手としての役割が挙げられた。高齢者の参加を促進させる効果については、高齢者サロン当日に参加する高齢者の方が少なかったため、民生委員の方と私たち 2 班の班員が一緒に周辺に住む高齢者のお宅へ参加の呼びかけをした際に、学生がいるなら、とお宅から出てきてくれた高齢者の方が多かったため、効果を実感したということであった。②市役所にとって gain が cost を上回っているかに関しては、来月も開催、学生を呼ぶ方針や今後も継続して行いたいと回答していたことから、達成されていると考えられる。現在サロンを開催する際市役所の負担（cost）になっているのはコンテンツ作りで、場所の手配は特に負担（cost）になっていない事がわかった。③の次回開催時に役立てる改善点としては、余裕を持った時間設定とコンテンツづくりが挙がった。コンテンツについては、フードロスと関連付けたいとのことであった。以上のことから、高齢者サロンに関わる際の市役所の gain は cost を上回っているため、今後も継続していく事が予測できる。

JA の方々に対するヒアリングより、野菜提供の gain について、地元農家さんにとっては、普段は捨てられてしまう大切に育てた地元野菜を学生に美味しく食べてもらえるという点、JA としては、フードロスの削減と地域貢献をしていることをアピ

ールすることで企業イメージを上げられる点が挙げられた。cost については、出荷できない普段は畑に捨てている野菜を捨てずに集めるという cost があったが、地元農家の方に JA に持って来ていただくタイミングを、出荷する野菜を持ってくるときに合わせてもらえれば、それほど大きな cost にならないだろうということだった。以上のことから、今後の高齢者サロンに関わる際の地元農家の方・JA の gain は cost よりも大きいと言える。

第3章　終わりに

3.1 結論

以上の結果より、高齢者サロンに関わる全ての主体が cost より gain の方が大きくなることが分かった。よって、本演習の目的である高齢者サロンを継続的に行っていく仕組みを作ることができた。

3.2 今後の展望

以上のように、高齢者サロンの持続的な仕組みを作ることはできたが、今後も高齢者サロンが継続して行われていくか考えるため、学生・高齢者・市役所・地元農家の各主体について持続性を考える。

まず学生については、12 月の高齢者サロン後のアンケートで、実際に参加した学生 9 人中 8 人が次回も参加したいと回答しているため、一度サロンに参加した学生は継続的に参加してもらえる可能性は高いと考えられる。今後の課題としては、新たな参加者を呼び込むため、今までサロンに参加したことのない学生の参加を促すことが挙げられる。

次に高齢者については、12 月の高齢者サロン後のアンケートで、10 人中 10 人が次回もサロンに参加したいと回答しているため、継続的にサロンに参加する可能性が高いと考えられる。また、前回のサロンにも参加した方が 10 人中 7 人だったことから、次回以降も一定数の割合で継続的に参加する方がいると見込まれる。

続いて市役所については、今後も継続してサロンを開催する意向があることが確認できている。さらには、市内の他の地域への拡大も視野に入れていることから、今後も継続的な開催が見込まれる。

最後に地元農家については、JA 谷田部を中心に生産者の方々に呼びかけをしていただき、余っている野菜を月 1 で提供していただくことになった。よって、それぞれの主体について持続性が見込まれると考えられる。

なお、今後の活動として、高齢者サロンはすでに次回の高齢者サロンの開催が決定しており、2022 年 1 月 13 日木曜 11 時～11 時 40 分、高須賀地区研修センターにて行われる。私たち 2 班の有志が運営に関わる予定である。

3.3 今後の課題

高齢者サロンを今後も継続して行っていく上で、サークルや個人に私たちのグループが現在行っている活動の引き継ぎをすること、今後高齢者と学生が高齢者サロンに積極的に参加したいと思うコンテンツを作ること、次回の高齢者サロン開催に向けての学生集め・野菜の受け取り・サロンの内容決めなどの準備が課題となっている。これらの課題に対して、次回以降の高齢者サロンでどのように対応していくかは現在検討中である。

3.4 謝辞

最後に、本演習を進めるにあたりご協力いただいた、高齢者サロンに参加された皆様、高須賀地区民生委員の皆様、つくば市役所 地域包括支援課 松尾様、社会福祉協議会地域福祉推進室 大竹様、つくば市谷田部農業協同組合の皆様に深謝致します。

3.5 参考文献

[1] 「都市部多世代交流型デイプログラム参加者の 12 か月間の効果に関する縦断的検証 ：Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて」, 亀井智子ほか, 老年看護学 Vol.14 No.1, 2010, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jagn/14/1/14_KJ00007062611/_pdf/-char/ja

[2] 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果（全体版）内閣府 H25 年度版